

声楽教育分野における地域貢献の可能性

— 秋田県の高齢社会における声楽講座 —

爲我井 壽 一

Possibilities for Contribution to the Community in the Field of Vocal Music

-Lectures on how Vocal Music impacts the lives of Senior Citizens' in Akita Prefecture, Japan-

TAMEGAI, Hisakazu

Abstract

In 2014, I delivered a series of public lectures on vocal music in Akita Prefecture, aimed at senior citizens aged 60 years or older. The topics covered were vocalization and singing techniques. From conversations with senior citizens attending the lectures, it became apparent that the learners' needs with regard to education in singing varied considerably. The needs could generally be divided into three categories, described below along with the instruction that I planned in order to meet each need:

- A: Cultural Education/Lifelong Learning: vocal music lectures/concert
- B: Enjoying Singing: introductory lectures on vocal music
- C: Specialized Vocal Music Education: vocal music tutorials for individual learners

In 2015, courses pertaining to categories A and B were held in four cities in Akita Prefecture. Through follow-up questionnaires administered to the participants, it was confirmed that these courses met community members' perceived needs in terms of education in singing.

Key Word : contribution to the community, lectures on vocal music, vocalization and singing techniques, aging society

I はじめに

筆者は平成21年度より秋田大学公開講座において、一般市民を受講対象者とした「発声法と歌唱法」の声楽講座を開催している。この声楽講座は地域の歌唱学習のニーズに対応することを目的として実施している。そのため声楽学習経験のない人でも参加できる講座とした。しかし、実際に講座を開始してみると受講生のニーズの多様性や参加者の年齢層が年々高くなってきたことから、講座の在り方と方法について再検討しなければならなくなってきた。

平成21年度から平成25年度までの公開講座では、テーマを「イタリア歌曲」「ドイツ歌曲」「日本歌曲」「童謡・唱歌」等の学習法とした。基礎的な発声法と歌唱法についてグループレッスンを中心に行った。その結果、参加者の感想やアンケートから概ね好評であることが分かった。だが全体的な指導では歌い方の基本は指導できるが、個人の感覚的な声の調整法に関しての指導には限界があることも確認できた。

声楽は“体が楽器”であるため、一人一人異なった楽

器を持っているようなものである。この“体が楽器”という発想には、体をどのように使えば良い声で歌声を遠くに飛ばすことが出来るかというニュアンスが含まれている。人間の声は、体はもちろんだが心理的な面からも影響を受けるものである。そのため声楽は歌うときだけではなく、普段の生活においても“体と心”のコンディション調整やコントロールに気を付けることが重要となってくる。

平成26年度の講座では受講対象者を60歳以上の「シニア世代」とし、高齢者の「生活の質」の向上に歌唱学習が貢献できるかどうかを検討した。方法として、受講生に講座だけではなく自宅でも出来る「簡単な声出し練習」を宿題として出して3週間毎日実施してもらった。講座終了後、受講生の心や体に何か良い変化があったかどうかをアンケート調査した。その結果、「気分」「声」「歌」が変化した受講者が多くみられた。また「その他」として家族との「対話」が増えた例や夫婦の「コミュニケーション」が円滑になったという報告もあった。「歌うこと」の「楽しみ」や「学び」が高齢者の生活の中にある

ことは、「活力」や「生きがい」の創出に役立っていることが分かった。このようなことから、歌唱学習は高齢者の「生活の質」の向上に貢献できる可能性があるかと判断した。

また、高齢者の「歌うこと」に関しての「学び」のニーズにも多様性があることが分かった。今後、筆者は地域貢献を行う上でこのような受講生の多様なニーズに応じた新しい講座形式（方法）も必要ではないかと考えた。そのため受講者を3種類の学習タイプ（A～C）に分類し、それに対応した講座形式（方法）を考えた（表1）。平成26、27年度はAタイプの受講生に対応する「声楽

レクチャーコンサート」を秋田大学60周年記念ホール、横手分校（横手市ふれあいセンターかまくら館）で開催した。また、Bタイプの受講生に対応する「声楽入門講座」を秋田大学60周年記念ホール、北秋田分校（阿仁ふるさと文化センター）、男鹿分校（男鹿市民文化会館）で開催した。その結果、来場者数やアンケート内容等から、これらの2つの講座が地域の歌唱学習に関するニーズに合致したものであることを確認した。今後、Cタイプの受講生に対応する「個人レッスン形式の声楽講座」の開催を来年度以降に検討したいと考えている。

表1 歌唱学習者のニーズによるタイプ分けと考えられる講座形式

タイプ	学習者のニーズ内容	講座形式
A	歌唱学習を生涯学習・教養学習として学びたい受講者	「声楽レクチャーコンサート」 特徴：演奏と作品解説付き声楽コンサート
B	声を出すこと、歌を気軽に楽しむことを目的とした受講者	「声楽入門講座」 特徴：歌の楽しさと学びを味わう講座
C	専門的な声楽学習を深めたいと考える受講者	「個人レッスン形式の声楽講座」 特徴：個人レッスンによる声楽指導

II 声楽学習と指導の在り方について

1. 声楽指導における専門性の活用

地域貢献として大学公開講座で声楽講座を行うことこの目的は、声楽の専門性を活用して地域の人々の歌唱学習に関するニーズに対応することである。だが、声楽の基礎学習経験のない多くの受講生に専門的な技術や知識をそのまま伝えることは出来ない。

声楽学習には「歌を楽しむ」、そして「歌を学習する」という2つの要素がある。前者は人が歌を素朴に歌いたいという本能的な感情である。「歌の質」を求めなければ誰でも「歌を楽しむ」ことはできる。だが、後者の「歌を学習する」ということは歌に関する技術や知識を学習し、自己の歌唱能力を客観的に判断しながら向上させていくことである。これは歌に関する自分の能力を向上させたいという願望であるが、周知のように専門的な声楽学習においては練習や訓練が必要である。この基本学習において初心者には「歌を楽しむ」ということが困難となる場合があるため、指導者は受講生の資質や能力、学習状況等を観察しながら講座を実施することが重要である。

筆者が対象としている受講生は一般市民であり、声楽学習経験のない参加者も含めて“どなたでも”としてあることから、初心者が専門的な技術や知識を理解できるような説明の仕方や講座の雰囲気作りを心掛け指導を行った。

2. 声楽学習の基本学習

音楽大学等での専門的な声楽の基本学習は、母音唱法による発声訓練を基本とした発声法である。そして歌唱法としてイタリア古典歌曲が教材として使われる。イタリア語の歌唱法について蔵田（1997）は次のように述べている。「イタリア語で Cantare sul fiato non col fiato（息の上で歌う、息であるいは息の力で歌わない）という発声に関する技術の定義がある。これは、声帯より下部の気管において上昇して来る呼気を、求めている音（あるいは言葉）によって必要最小限の量だけ通過させ、あとは下に保つ、あるいは下に引き下ろすというコントロールの仕方である。息であるいは息の力で歌わないとは、声帯を通過させる呼気力や、声帯に呼気をぶつける力によって歌うことではない、ということである」。これは母音のつながった連続性の特徴をもつイタリア語特有の歌い方である。これが声楽の歌唱として基本であることは言うまでもない。

しかし、ドイツ語や日本語の特徴はどちらかということの子音の発語表現の美しさにあると思われる。明らかにイタリア語の母音の滑らかな連続性を重視した歌い方は異なると考えられる。だが、大賀（2003）は、これまでの日本語唱法の子音を強調した歌唱法についての問題点として「日本語の音節は子音と母音が一体化し、音素として感じる意識が希薄であるため、子音をたてることによって一音節一音節を強調して言葉を伝えようとしてきた」と指摘している。そして歌唱における日本語の子音

と母音の結びつきについて「子音を意識し過ぎると日本語の流れは分断される。音節を十分に保つことは大切だが、子音と母音が分離してはいけない」と、子音をたてるのではなく、音節もたてるという意識が重要であることを述べている。よって、日本語で歌唱する場合、言葉の発音（特に子音）と歌唱におけるメロディーの連続性としての母音のバランスをどうコントロールするかということが非常に重要であり、学習者が学ばなければならない基本学習の一つであると考えられる。

3. 声楽学習における困難さ

通常、専門的な声楽学習は、歌唱時の自分の声を客観的に判断することが難しいため、声楽教師からの助言をもとに指導を受けることとなる。誰でも自分の声と録音された自分の声を比べて聴くと、その声の聴こえ方の違いに気づくはずである。特に、初心者にとっては自分の歌声の判断や微妙な声の調整は困難なことである。

声楽学習には中長期的な練習や訓練によって、歌唱時における自分の声を判断する「耳の感覚」の成長も重要となる。声楽学習における歌唱時の自分の声の判断力について、テノール歌手で藤原歌劇団総監督や新国立劇場芸術監督であった五十嵐芳芳（1928-2011）は、「声楽は、自分の声を耳が正しく判断できるようになるには10年位はかかる」と、筆者が声楽レッスンを受講した時に語っていた。専門的な声楽学習は、練習や訓練を行うことによって自身の「耳の感度」も向上させていくこととなる。

だが、声楽講座では受講生が自分の歌声を「客観的に判断」出来るようになるための時間はない。学習者は、指導者の判断による助言を聞きながら学習を進めることとなる。公開講座では、受講生がこのような「声楽学習の困難さ」をあまり「難しく感じない」で、如何に「楽しみながら学習する」ことが出来るかに配慮して声楽指導を実施した。

Ⅲ 声楽講座の学習テーマと開催の流れ

これまで実施した公開講座をテーマや指導した内容等から3つの要素に分類した。

1. 「発声法と歌唱法」：平成21年度～平成25年度

声楽の発声法と歌唱法に関する学習方法を中心的なテーマとして「イタリア歌曲」「ドイツ歌曲」「秋田の歌曲」「日本歌曲」「童謡・唱歌」等の教材を使って指導した（表2：No.1～No.6）。

2. 「シニアのための発声法と歌唱法」：平成26年度

60歳以上のシニア世代を対象として高齢者が発声法や歌唱法を学ぶことで、人生を元気に生きていくための“生きがい”の創出を目的として開催した。また「歌うこと」が人々の心や体にどのような変化をもたらすのか、歌唱学習による高齢者の「生活の質」の向上について調査した（表2：No.7）。

3. 大学の分校を活用した「声楽レクチャーコンサート」「声楽入門講座」：平成26, 27年度

今後の声楽公開講座の方向性として、受講生の歌唱学習に関するニーズを3種類の学習タイプに分類した。そして平成26, 27年度にA「声楽レクチャーコンサート」、平成27年度にB「声楽入門講座」の2種類の声楽講座を大学と大学分校（横手, 北秋田, 男鹿）で実施した。これは、平成26年度に開催した公開講座での受講生のアンケートから秋田県の他の地域での開催を要望する声に応えたものであり、受講生の歌唱学習の多様性に対応するため講座形式（方法）を検討した結果でもあった（表2：No.8～No.12）。

C「個人レッスン形式の声楽講座」は今後、実施について検討したい。

表2 平成21年度から平成27年度に実施した声楽講座

No	講義題	開催期日	時間	会場	参加者
1	高校生・社会人のための声楽講座 —学習方法と歌唱表現—（前期）	平成21年5月10日31日、6月14日、28日、7月19日8月2日、9日	13:30～15:00	秋田大学教育文化学部2号館140教室	15名
2	高校生・社会人のための声楽講座 —学習方法と歌唱表現—（後期）	平成21年10月18日、11月15日、29日、12月13日平成22年1月10日、31日、2月21日	13:30～15:00	秋田大学教育文化学部2号館140教室	15名
3	ドイツ歌曲の学習法と演奏法 —ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンの歌曲—	平成22年11月23日、30日12月7日、14日、21日	第1回 14:00～16:00 第2回～第5回 18:00～20:00	秋田大学教育文化学部2号館140教室	9名
4	声楽講座 —秋田の歌曲を歌う—	平成23年11月13日、20日、12月4日、11日、18日	13:30～15:45	秋田大学60周年記念ホール	15名

5	声楽講座 一発声法と歌唱法一	平成25年3月3日, 10日, 17日, 24日	14:00～16:00	秋田大学インフォメーションセンター	15名
6	発声法と歌唱法 一童謡・唱歌, 秋田の歌曲を歌う一	平成26年3月1日, 2日, 15日, 30日	10:00～12:00	秋田大学教育文化学部2号館140教室	20名
7	シニアのための発声法と歌唱法 一楽しく元気になる声の出し方と歌い方一	平成26年11月30日, 12月6日, 13日, 21日	14:00～16:00	秋田大学インフォメーションセンター	24名
8	レクチャーコンサート 「成田為三と山田耕筈の歌曲」	平成27年2月14日	14:00～15:30	秋田大学60周年記念ホール	150名
9	声楽入門講座 「歌は人生を楽しむ 一声の出し方, 歌い方のヒント一」	平成27年6月13日	14:00～15:30	秋田大学60周年記念ホール	71名
10	声楽入門講座 「歌は人生を楽しむ 一声の出し方, 歌い方のヒント一」	平成27年6月20日	14:00～15:30	北秋田市阿仁ふるさとセンター	51名
11	声楽入門講座 「歌は人生を楽しむ 一声の出し方, 歌い方のヒント一」	平成27年7月4日	14:00～15:30	男鹿市民文化会館	69名
12	レクチャーコンサート 「秋田県出身作曲家の歌曲」	平成27年7月19日	14:00～15:30	横手市かまくら館	153名

IV 高齢者の生活と声楽学習

1. 高齢者を対象とした声楽講座

内閣府（2015）の平成27年版高齢社会白書によると、平成26年度の我が国の総人口に占める65歳以上人口（高齢化率）は26.0%（前年25.1%）であった。中でも秋田県の高齢化率は32.6%で全国1位であり、最も低い沖縄県の19.0%との差は非常に大きいことが分かる。同じ東北地方の他県と比較すると宮城最は24.6%で全国平均を下回り、他の県（福島県：27.8%、山形県：29.9%、岩手県：29.6%、青森県：29.0%）と比較しても秋田県の高齢化率は突出していることが分かる。今後、日本社会は高齢化が一層進み45年後の平成72（2060）年の高齢化率は39.9%となり、2.5人に1人が65歳以上の高齢者となると予想されている。

社会の高齢化が進行する中で、高齢者が自立や健康を保ち、「生活の質」を維持していくことが今後の重要な課題となってくる（安永ほか、2002）。人々が仕事をリタイアした後続く長い人生をどのように健康で精神的にも豊かな生活を送ることができるかということが重要なテーマとなってくる。出村・佐藤（2006）は、「高齢者が心身の健康を維持しながら、自立し、活動的で生産的な老後を過ごすことが社会に求められている」とし、日本社会で生きる高齢者の「生活の質」に対する評価の重要性を指摘している。

このようなことから、筆者は地域貢献としての声楽講座の意義について再考することとした。

声楽講座参加者の歌唱学習に求めるニーズの多くが「声の出し方」や「歌い方」であることが分かってきた。と同時に受講者に占める高齢者の割合が年々増えてきたことにも気づいた。秋田県の人口に占める高齢者の割合（高齢化率）が日本一高いことが、講座における高齢者の参加受講者数からも理解できた。そして高齢者が熱心に声楽を学習する姿から人々の生活に歌がどのように影響しているのか、あるいは生活に役立っているのか興味を持った。

2. 高齢者の歌唱学習の効果

平成26年度の公開講座では、受講対象を60歳以上のシニア世代として「シニアのための発声法と歌唱法～楽しく元気になる声の出し方と歌い方～」を開催した。この講座では、高齢者の「生活の質」の向上に歌唱学習が関与できるかどうか、そして受講者の歌唱学習に対するニーズから対応すべき講座方法について検討した。

講座では受講者に自宅で出来る「簡単な声出し練習」を宿題として出した。これによって声楽学習の継続性が保てるようにしながら3週間て4回の講座を実施し、その効果を調査することとした。その結果、講座後のアンケートや受講者との対話から、歌唱学習が生活の中にあることにより「気分」「声」「歌」「コミュニケーション」等の変化が見られた。受講者の歌唱学習に対する感想では、「難しいが楽しい」という声が多く聞かれた。高齢者であっても基礎的な学習の継続によって、自身の「声」

や「歌」の向上を実感することによって「気分」が能動的となり、学習に対して意欲がわき生活の中に活力が生じていることが分かった。このことから歌唱学習が高齢者の「生活の質」に貢献できる可能性があると判断した。

平成26年度の講座を進める中で、人々が「歌うこと」の「楽しみ」や「学び」から生活の中に“活力”や“生きがい”を求めていることも分かった。このようなことから受講者の声楽学習に求める種類を3種類のタイプに

分け、それに対応した講座方法を見出すことが出来た(表3)。これらを今後の講座の在り方と方向性として検討し、平成26、27年度にAタイプ対応の「声楽レクチャーコンサート」と平成27年度にBタイプ対応の「声楽入門講座」を開催し、成果を確認することができた。Cタイプ対応の「個人レッスン形式の講座」は、来年度以降に実施を検討することとした。

表3 受講者の歌唱学習タイプへの対応としての講座形式(方法)

A	教養学習・生涯学習タイプの受講生への対応：「声楽レクチャーコンサート」
B	歌を気軽に楽しむタイプの受講生への対応：「声楽入門講座」
C	専門的な声楽学習タイプの受講生への対応：「個人レッスン形式の声楽講座」

V 地域社会での声楽講座の開催

1. 声楽レクチャーコンサート

平成26年度と27年度に大学公開講座「声楽講座」を発展させた講座として声楽演奏と解説付きの声楽レクチャーコンサートを開催した。この企画は、受講生の歌唱学習に対するニーズから3つの学習タイプからAタイプの受講生を念頭にしている。このタイプの参加者は歌唱学習を教養や生涯学習と考え、歌唱学習に関して「学習する」ことによりウエイトを置いていると考えられる。

(1) レクチャーコンサート「成田為三と山田耕筈の歌曲」

日程：平成27年2月14日 会場：秋田大学60周年記念ホール

参加受講者：150名

【プログラム】

I 成田為三の歌曲

1. 浜辺の歌
2. 安房にて
3. 望郷の歌
4. 木の洞
5. 秋田県民歌

II 山田耕筈の歌曲

1. からたちの花(ピアノ演奏)
2. 鐘が鳴ります
3. この道
4. 木の洞
5. 赤とんぼ

成田為三(1893～1945)

明治26年秋田県北秋田郡米内沢村(現在の北秋田市米内沢)に生まれた。秋田師範学校(現在の秋田大学教育文化学部)で音楽を学び小学校教員となる。だが音楽学習に対する情熱から1年余りで退職し、東京音楽学校(現在の東京芸術大学音楽学部)に進んだ。しかし、当時の東京音楽学校には作曲科がなかったため個人的に当時ドイツのベルリン留学から帰国していた山田耕筈に作曲を師事した。その後、鈴木三重吉らによる童謡「赤い鳥」に作品を提供して「カナリア」等によって童謡作曲家として有名になった。第1次世界

大戦後のベルリンに留学し対位法等のドイツ音楽の作曲様式を身に付け帰国した。多くの作品を作曲したが戦災によってその多くが焼失してしまった。

山田耕筈(1886～1965)

明治19年東京に生まれ、東京音楽学校を卒業後ベルリンに留学した。当時のドイツ音楽界ではR.シュトラウス(1864～1949)が全盛期であり、彼のオペラ等から音楽的な影響を強く受けていることが山田の著作からも分かる。帰国後、多くの困難な状況に直面しながらも日本の交響楽団の基礎を作り、当時の日本音楽界の重鎮として活躍した。彼の作曲作品はオペラや交響曲、その他多くのジャンルに渡り数多くの作品を残した。彼の歌曲作品はドイツ音楽を土台としたもので、日本語の歌詞の特徴とメロディーとのバランスを考慮したもので日本歌曲として有名な作品が数多くある。

成田為三と山田耕筈の歌曲「木の洞」について

成田為三は、東京音楽学校時代は山田耕筈に作曲を師事していた。彼が作曲した三木露風の歌詞「木の洞」に、6年後に山田耕筈も作曲している。この師弟関係にある二人の同じ歌詞に作曲された歌曲「木の洞」を比較してみると、共通点として成田為三の作品の中に山田耕筈がベルリン留学で強い影響を受けたR.シュトラウスの音楽や雰囲気が感じられる。「浜辺の歌」での成田為三の作風は、素朴で美しい抒情的な旋律に特徴がある。また同時代の「望郷の歌」にしても音楽の進行やメロディーの流れがシンプルである。ところが「木の洞」は、オペラの Aria ではないかと思われるほどドラマティックな音楽表現が行われている。ピアノパートはオーケストラの伴奏を想像させ、作品の後半のレチタティーヴォ的な独白では「己は何人ぞや」から「我が身は」での高音域での声によるクレッシェンドによって曲の圧倒的な音楽

表現を計算して終結している。山田耕筰の同じ歌詞による「木の洞」を見てみると、成田の作品とは異なる表現によって音楽が深く重厚に表出されている。だが、両者の作品には「言葉と音楽」の結びつきとして、山田耕筰がベルリンで心酔したR. シュトラウスの音楽の色合いが漂っているように感じる。コンサートでは、このような解説を行うことによって聴衆が演奏者の解釈と演奏を普通のコンサートよりも立体的に鑑賞することが出来るのではないかと考えた。

秋田大学60周年記念ホールで実施した「成田為三と山田耕筰の歌曲」では、二人の作品の中に隠れた音楽的な類似性と独自性について解説しながら演奏を行った。成田為三は、東京音楽学校に作曲の教師がいなかったため、当時ベルリン留学から帰国した直後の山田耕筰に作曲の指導を受けた。山田が留学した当時のドイツではR. シュトラウスの音楽がドイツ音楽界で脚光を浴びていた。そしてベルリンで西洋音楽を学んでいた山田耕筰がR. シュトラウスの音楽に心酔していたことが彼の自伝からも読み取れる。成田為三作曲による「木の洞」のピアノ伴奏部からはオーケストラによる音色を感じさせ、歌唱部での最後に歌われる高音ではドラマティックな音楽表現が見られる。この成田為三が「木の洞」を作曲した6年後に、彼の師である山田耕筰も同じ歌詞に作曲している。筆者は両者の「木の洞」を聴衆が聴き比べることによって、二人の作品の中に山田耕筰が心酔していたR. シュトラウスの音楽を想像させる音色が聴こえてくるのではないかと解釈した。そしてこの「類似性」から二人が師弟関係にあったことを伺わせる興味深い作品であると考え、解説と演奏を行った。

(2) 声楽レクチャーコンサート「秋田県出身作曲家の歌曲」

日程：平成27年7月19日 会場：横手市ふれあいかまくら館

主催：秋田大学横手分校 参加受講者：153名

【プログラム】

I 成田為三の歌曲

1. 浜辺の歌
2. カナリア
3. 木の洞
4. 秋田県民歌

II 小松耕輔の歌曲

4. 母
5. 砂丘の上
6. 泊り舟

2月14日に秋田市で実施したレクチャーコンサートを秋田大学横手分校でテーマを変えて実施した。秋田県出身の作曲家は成田為三と小松耕輔の名が知られてはいるが、その歌曲作品や他の作曲家の存在はあまり知られてはいない。筆者は科研費による研究分担者としてこのテーマを演奏録音やコンサートで発表してきた。また声楽公開講座や出前授業等でも声楽指導を行ってきた。だが成田為三の「浜辺の歌」、秋田県民歌や小松耕輔の「母」等以外は、知られておらず作曲家の生涯や作品の背景等は理解されていないことが多かった。そのため、このテーマに関する声楽研究の発表を解説付きのコンサートとして、より受講生に理解してもらうことを目的として実施することとした。

秋田県出身の作曲家として成田為三(1893-1945、旧北秋田郡米森吉町出身)と小松耕輔(1884-1966、旧由利郡東由利町出身)の二人の存在は大きい。成田為三の「浜辺の歌」や小松耕輔の「母」は日本歌曲を学習する者にとって重要なレパートリーとなっている。特に「浜

表4 「声楽レクチャーコンサート」参加者の年齢層の割合

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	無回答
①秋田市	回答数	1	5	1	6	1	36	58	15	5
	構成比	1%	4%	1%	4%	8%	26%	42%	10%	4%
②横手市	回答数	0	1	4	0	12	31	81		0
	構成比	0%	1%	3%	0%	9%	24%	63%		0%

表5 「声楽レクチャーコンサート」参加者の性別の割合

		回答数	構成比
①秋田市	男性	33	24%
	女性	94	28%
	無回答	11	8%
②横手市	男性	27	21%
	女性	41	32%
	無回答	61	47%

辺の歌」は学校教育において音楽の歌唱教材として歌われていることから多くの人に愛唱されている歌曲である。しかし、『秋田のうたと音楽家』（井上、1987）を見ると、秋田県からはこの二人の作曲家以外にも多くの作曲家が存在していることが分かる。

今回のレクチャーコンサートでは、それらの作曲家から成田為三、小松耕輔、その他の作曲家として平岡均之（1901-1976、旧仙北郡田沢湖町出身）、後藤惣一郎（1922-、旧北秋田郡鷹巣町出身）、石田一郎（1909-、秋田市出身）、斎藤佳三（1887-1955、旧由利郡矢島町出身）等の歌曲、また民謡やわらべ歌から豊口清志（1885-1953、鹿角市出身）によって最初に採録作詞され、後に岡本敏明（1907-1977、宮崎県出身）によって現在の秋田市立金足西小学校で採譜作曲された「どじょっこふなっこ」も解説と演奏を行うこととした。それぞれの作品は作曲家の音楽的な特徴を表した歌曲となっている。歌詞の意味やメロディーとの結びつきを考え、作曲家がイメージした音楽を解釈し、解説と演奏を行うこととした。また、作曲家の生涯や出身地の地域性も作品に影響しているのではないかと考え、会場の聴衆に問いかけながらコンサートを進めた。

2. 声楽入門講座「歌は人生を楽しくする 一声の出し方、歌い方のヒントー」

秋田市・北秋田市・男鹿市で次のような内容で講座を実施した。

表6 声楽入門講座の実施内容

I	はじめに：講座の内容と進め方について
II	簡単な声出し練習 1. 顔の体操 2. お腹と息の体操 3. 鼻濁音とハミングの練習 4. 声出し練習
III	歌唱練習 1. 「ふじさん」「ふるさと」「浜辺の歌」 ・発声に注意して音楽の流れに乗って歌いましょう 2. 「どじょっこふなっこ」 ・ことばの面白さを歌で表現してみましょう 3. 「この道」 ・歌い方の表現の仕方を工夫してみましょう 4. 「秋田県民歌」 ・歌詞の内容と音楽のイメージを表現しましょう
IV	まとめ：質疑・応答

平成26年度に開催した声楽講座参加者のアンケートから、秋田大学分校での声楽講座開催の希望があった。このことから秋田市以外の県内の地域でも歌唱学習に関

表7 発声法の導入として実施した『簡単な声だし練習課題』

No.		練習内容	注意点
1	顔の体操	「ニーー」と笑う	喉に力を入れない
2		目を大きく開けてビックリした顔をする	鏡を見て練習しましょう
3		舌を前に出して軽く「ア～」と声を出す	アゴやノドを脱力して柔らかく声を出す
4	お腹の体操	短く「ス・ス・ス・ス ハ・ハ・ハ・ハ」	歯を閉じてスタッカートで
5		長く「ス～ス～ス～ス～ ハ～ハ～ハ～ハ～」	やや長めに
6		破裂音で「パッ・パッ・パ・パッ・パ～」と声を出す	お腹の動きと響きのタイミングに注意して
7	響きの練習	ハミングから声にする「N～Ma～（ン～マ～）」	ハミングの響きを上に感じてから柔らかく口を開けて声を出す

表8 「声楽入門講座」参加者の年齢層の割合

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	無回答
①秋田市	回答数	0	0	0	1	10	28	22	7	0
	構成比	0%	0%	0%	2%	15%	41%	32%	10%	0%
②北秋田市	回答数	0	0	1	1	1	14	19	5	4
	構成比	0%	0%	2%	2%	8%	29%	40%	5%	8%
③男鹿市	回答数	0	1	0	0	2	27	27	1	1
	構成比	0%	2%	0%	0%	3%	46%	46%	2%	1%

表9 「声楽入門講座」参加者の性別の割合

	①秋田市			②北秋田市			③男鹿市		
	男性	女性	無回答	男性	女性	無回答	男性	女性	無回答
回答数	18	46	4	6	37	5%	8	43	8%
構成比	26%	68%	6%	13%	77%	10%	14%	72%	14%

するニーズがあることに気づいた。だが、これまでの公開講座では一定の出席数が講座の参加条件として求められているため、参加出来ない人もいたようであった。そのため、この講座では修了証は発行せずに、3か所の会場（秋田市：秋田大学60周年記念ホール・北秋田市：阿仁ふるさと文化センター・男鹿市：男鹿市民文化会館）のどの講座に参加してもよいこととした。

開催後、講座には一般の市民だけではなく発声や歌唱に関する指導法に関心を持った合唱団や音楽教育関係の指導者やリーダーも参加していたことが分かった。北秋田市阿仁での参加者からは、「北秋田市の中心市街地である鷹巣の方が交通の利便性がある。別の機会に鷹巣で開催してほしい」等の声があった。今後、会場の設定についても考慮すべきであろう。

表8に見るように各地域とも参加者に占める高齢者の割合が高かった。また、男性よりも女性の参加者の方が多かったことも共通であった（表9）。この傾向は、これまでの声楽講座と同様であった。

今回の参加者に占める60歳代以上のシニア世代の割合は、秋田市が83%、北秋田市が74%、男鹿市が94%であった。3市全体では84%がシニア世代であった。

VI 声楽入門講座のアンケートからの考察

声楽入門講座を実施した3会場に参加受講者にアンケート（質問1～5、自由記述）調査を行った。アンケートの回答からは、「声楽入門講座」が受講者の歌唱学習に関するニーズに合致したものであることが確認できた（表10、11）。

考察：質問1～5に関してアンケートの回答結果と自由記述等から検討していく。

質問1：歌は楽しいですか？

3市の会場とも「①楽しい」と回答した人がほとんどであり、「歌うこと」をポジティブに考える人がほとんどであった。だが、「④楽しくない」とネガティブな回答をした参加者がいたことも面白く感じた。その理由は「歌わせられるのが苦痛で、歌ったことがない」であった。しかし講座に参加して『簡単な声出し練習課題』（表5）等を楽しむことができたようであり、今後このような講座を体験することによって歌うこと

の楽しさを感じられると考えられる（表11 その他7）。また「③それほどでもない」と回答した3名も、講座を通して「歌の学習」に対してポジティブな考え方になっていたことが分かった（表11 その他3, 4, 18）。

質問2：どの程度歌っていますか？

「④あまり歌わない」「⑤全く歌わない」と回答した参加者の背景をアンケートから読み取ると、何らかの理由が存在しているが今回の講座に参加して歌の楽しさを理解したようであった（表11 発声法2その他7, 18）。

質問3：どんな歌を歌っていますか？（複数回答可）

「①童謡・唱歌」「②合唱曲」「④歌謡曲」が3会場とも多いことが分かった。「⑦その他」として、ラテン、ラジオ歌謡、シャンソン、ゴスペル、讃美歌があった。声楽分野として「③クラシック」を歌っている人は、秋田市13名、北秋田市4名、男鹿市3名であった。高齢者の参加者が多いためか「①童謡・唱歌」がどの会場でも一番多かった。男鹿会場では「②合唱曲」の回答が比較的多かった理由は合唱団に所属している参加者が団体で来場した結果であろう。

質問4：声楽学習経験はありますか？

3市の会場とも「②ない」が多数であったことから声楽学習経験のない人が多いことが分かった。今後このような講座を県内の地域で開催し、もっと多くの人々に声楽の基礎学習を体験する機会を提供することは意義があると考えられる。

質問5：本日の講座について、または歌に関して何に興味がありますか？（複数回答可）

3市とも「①発声法」と「③歌唱法」が多く、次に「歌詞・音楽の解釈」「考え方・メンタル」の順番であった。「⑤その他」として国歌（君が代）が個人的に好きで歌う人が増えてほしいという意見があった。また、普段は歌を全く歌わない参加者が「自分が講座を通して歌を楽しむことが出来るかどうかを試すために参加した」という意見があり、大変興味深かった（表11 その他7）。

声楽教育分野における地域貢献の可能性

表 10 声楽入門講座アンケート1 (質問1～5)

質問	地域			③クラシック	④歌謡曲	⑤演歌	⑥ポップス	⑦その他
	秋田市	北秋田市	男鹿市					
質問1 歌は楽しいですか?				13名	4名	3名		
①楽しい	52名	46名	53名	25名	17名	21名		
②普通	3名	1名	5名	8名	13名	13名		
③それほどでもない	2名	1名	0名	11名	7名	2名		
④楽しくない	1名	0名	0名	6名	1名	4名		
質問2 どの程度歌っていますか?				質問4 声楽学習経験はありますか?				
					秋田市	北秋田市	男鹿市	
①毎日	10名	6名	12名	①ある	17名	13名	12名	
②ほとんど毎日	18名	17名	28名	②ない	41名	35名	46名	
③普通	14名	16名	11名	質問5 本日の講座について、または歌に関して何に興味がありますか? (複数回答可)				
④あまり歌わない	15名	5名	3名		秋田市	北秋田市	男鹿市	
⑤全く歌わない	2名	2名	1名	①発声法	49名	31名	47名	
質問3 どんな歌を歌っていますか? (複数回答可)				②歌詞・音楽の解釈	24名	20名	21名	
				③歌唱法	43名	31名	35名	
①童謡・唱歌	32名	28名	29名	④考え方・メンタル	14名	10名	10名	
②合唱曲	19名	21名	27名	⑤その他	3名	0名	0名	

表 11 声楽入門講座アンケート2 (自由記述)

内容	アンケート例 (原文のまま)
発声法	1 これからのコーラスの練習に役立てたいです。普段の練習では課題の曲の練習だけで、このような発声練習ははじめてでした。(60代女性)
	2 日頃いかに声を出していないかよくわかりました。いつも合唱団の方々の表情が大げさに見えて違和感がありましたが、今日の声の出し方のご指導でなるほど……と納得できました(70代女性)
	3 自分の音域を広げたかったので発声法を身に付けたかったです。そういう意味ではとても参考になりました。(70代女性)
	4 顔の表情も声に関係がある事を知りました。(70代女性)
	5 ストレスケアを受けているが、私にとっては歌うことが一番と今日は参加しました。体全体がほぐれていく体感がありました。(50代女性)
	6 コーラスに参加したのですが、なかなかついていけず悩んでいましたが、すごく参考になりました。(60代女性)
	7 初めて教えてもらった感じで楽しく、よくわかりました。できているかどうか別として大変ためになりました。(60代女性)
	8 声を出すとき鶴のように上を向いて出すと出るがひびかない。アゴを引くと響くが高音が出にくい。(60代男性)
	9 声を出す時お腹はどのようになっているのでしょうか?出ているか?ひっこんでいるか?(70代女性)
	10 発声だけでなく声にして出すまでのことの大切さを学びました。これが鍵なのですね。続けたいと思いました。(60代女性)
	11 表面的に音を出していただけだということがわかりました。声出し練習は、とても大事な基本ということを知りました。(60代男性)
	12 体を動かす事によってリラックスして声も出しやすくなりました。(70代女性)
	13 ソプラノの声出しについて学ばせていただきました。(70代女性)
	14 専門的な発声法は、はじめてのことですたいへん勉強になりました。先生のをなごますような指導、すばらしいし感動しました。(60代男性)
歌唱法	1 みんなで声をだすことができうれしかったです。「みんなで」がよかったです。(60代男性)
	2 歌詞の解釈が大事とことに気付かせていただきました。(60代男性)

	<p>3 とてもわかりやすく、はずかしがらずにできた。説明も具体的で楽しかった。(50代女性)</p> <p>4 歌詞の内容(情景など)を意識しながら歌うのとそうでないのとでは大きな違いがあることがよくわかった。(60代男性)</p> <p>5 歌の意味、表情をいかに表現するかとても勉強になります。「歌は心」の表現です。(70代男性)</p> <p>6 「どじょっこふなっこ」の解説と実技指導は最高。(60代女性)</p> <p>7 わかりやすく楽しく歌うことができました。練習直後から良く声が出ているのがわかりました。(70代女性)</p> <p>8 歌をうたうことは、さまざまな工夫というのが必要であることを学びました。とてもよかったです。イメージして歌うことの大切さをつくづく感じました。(60代男性)</p> <p>9 勉強になりました。不安が少し取り除けた様な気持ちです。(70代女性)</p> <p>10 コーラスをやっていますが、ますます好きになりました。たのしくて本当に来てよかった。(70代女性)</p> <p>11 楽譜をよく読み込む事はとても参考になりました。(60代女性)</p>
その他	<p>1 楽しい講座でした。これから歌も大事に声を出して歌う生活をしたいと思います。妻は合唱をやっています。いっしょにつれてくれば良かった。内容、充実した講座でした。(年齢・性別記載なし)</p> <p>2 「歌は、全身で表現するものなんだあ!!」と先生の指導を拝見していて思いました。今日の講座から疲れている時こそ、びっくり顔で頭のテッペンから声をとばして、歌で人生を楽しんでできそうです!!数年前、講座に参加したときと同じ位、それ以上に楽しかったです。(50代女性)</p> <p>3 今回の講座を受けて声楽も楽しそうだと思った。ただし、お勉強も度が過ぎるとイヤになってしまいうそう……。 (50代女性)</p> <p>4 とても楽しく、わかりやすく受講させていただきました。ありがとうございます。(50代女性)</p> <p>5 顔の表情で発声が正確に出来ることを教わりました。すごい一言で、心がすっきりした感じ、とても良かった。充実感があり頭もすっきり、ストレス解消。発語の表現、納得しました。人間の生き方も幅と弾力感が重要です。(70代男性)</p> <p>6 歌をうたうことは、心を解放することですね。これからも、ヘタながら歌っていきたくて思いました。(60代女性)</p> <p>7 歌わせられるのが苦痛で、歌ったことがない。歌えるか試すために受講に来ました。人につられて歌って楽しかった。上手になったらもっと楽しいだろうな!練習すれば歌えるようになるのかな? (70代男性)</p> <p>8 秋田まで行くのは遠いので北秋に来ていただき、たいへんうれしい。この後も継続していただきたい。(60代女性)</p> <p>9 少人数のコーラスグループで週1回うたっていますが、ピアノの先生はいるけど指揮がいません。指揮の先生がいるだけで声に表情がでてくるように思いました。(60代女性)</p> <p>10 先生ご自身うたうこと教えて下さることを楽しんでいらっしゃる事が良くわかり、楽しく学ばせていただきました。又是非このような機会を作っていただきたいと思いました。(70代女性)</p> <p>11 気分がすぐれない時でも歌を歌うと元気になれるので、又来て指導してください。(70代女性)</p> <p>12 初回なのでいい企画と思えました。たくさんあつまって良かったです。自分には初歩的過ぎましたが。(60代女性)</p> <p>13 昨年、公開講座のアンケートに「なまはげ大学」に来ていただけたら、と夢のような希望を書きました。本当に感謝いたします。(60代女性)</p> <p>14 人生余いを楽しくと思ひ、なじみのない道に寄道をしまして、また新しい楽しみを頂きました。(70代女性)</p> <p>15 帰るときは来た時より声が出るようになりたいと思ひ、よい勉強になりました。とても楽しかったです。又、こんな会を作っていただきたいです。(70代女性)</p> <p>16 この様な勉強法は初めてなので、大変わかりやすくユーモアがあって楽しく過ごしました。またよろしくお願い致します。(80代女性)</p> <p>17 人生のかてになるので大いに活動してもらいたい。(60代男性)</p> <p>18 (芸術分野の中で)絵画は音楽にまさるか、Noが結論となる。その根拠は?その一端にふれたいとの思いで出席させていただきました。ともあれ先生体全体を使つての熱意ある講話、指導ありがとうございました。(70代男性)</p>

VII おわりに

筆者は、平成 21 年度から受講生の歌唱学習に関するニーズを調査しながら声楽講座を進めてきた。平成 26 年度に実施した 60 歳以上の「シニア世代」を対象とした講座では、高齢者の生活において歌唱学習が心や体に何か良い変化や効果があるかどうかを調査した。その結果、歌唱学習の「楽しみ」や「学び」を通して高齢者が“生きがい”を感じ“活力”を生み出していることが分かった。このようなことから声楽講座が高齢者の「生活の質」の向上に貢献できるものであることを確認した。また、参加者には歌唱に関するニーズとして 3 つの学習タイプの受講生がいることが分かった（表 1, 3）。それらのタイプは、声楽を教養や生涯学習として学ぶ受講生：A タイプ、歌うこと自体を気軽に楽しむ受講生：B タイプ、声楽学習を専門的に深めたいと考える受講生：C タイプの 3 種類に分類し、それに対応する講座を考え実施することとした。

平成 26 年度にこれらの 3 つの学習タイプの受講生に対応する講座を計画し、まず A タイプの「声楽レクチャーコンサート」を実施して成果を得ることが出来た。平成 27 年度は、「声楽レクチャーコンサート」、「声楽入門講座」の 2 種類の講座を秋田大学手形キャンパスと 3 つの大学分校（横手市・北秋田市・男鹿市）で実施した。アンケートの質問事項と自由記述の考察から、これらの 2 つの講座が地域の歌唱学習のニーズに貢献できるものであると分かった。しかし、アンケートの要望にもあった通り、今回の講座の継続とまだ講座を実施していない他の地域での開催を求める声に対応することが今後の地域貢献として重要であると考えた。また、どの地域でも高齢者の参加者が多く、男性よりも女性が多いことが特徴であった。そして若い世代の参加者が少ないことから、この原因が秋田県の少子高齢化社会の特徴なのか、あるいは若い世代の「歌うこと」に関するニーズ等の違いなのかを調査する必要があると感じた。このようなことから、今後の課題は若い世代から高齢者までが一緒に「歌うこと」を通して交流できる声楽講座を開催することである。

謝辞

秋田大学公開講座「声楽講座」の開催にあたり、地域創生課の職員の方々に様々な支援をして頂きました。深く感謝申し上げます。

参考文献

- 五十嵐喜芳（2011）『五十嵐喜芳自伝—わが心のベルカント』水曜社
- 井上隆明（1987）『秋田のうたと音楽家』秋田文化出版社
- 大賀寛（2003）『美しい日本語を歌う』カワイ出版
- 蔵田雅之（1997）教育と生命（1）：声楽における技術と精神、フェリス女学院大学音楽学部紀要 2、8-22
- 後藤暢子（2014）『山田耕筰 一作るのではなく生む一』ミネルヴァ書房
- 浜辺の歌音楽館（1988）『「浜辺の歌」の成田為三』秋田文化出版社
- 浜辺の歌音楽館（2008）『浜辺の歌音楽館公式ガイドブック』秋田文化出版社
- 爲我井壽一（2015）高齢者の歌唱学習とその効果について、秋田大学教養基礎教育研究年報 第 17 号、pp.63-72
- 出村慎一・佐藤進（2006）日本人高齢者の QOL 評価—研究の流れと健康関連 QOL および主観的 QOL、体育学研究、51：pp.103-115
- 内閣府（2015）『平成 27 年版高齢社会白書』「平成 26 年度 高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況」
(<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/index-w.html>)
- 羽石英里（2012）職業歌手にみられる音声障害への対処—音楽療法士の立場から：学際的視点に基づいて—、音声言語医学 53：177-182
- 羽石英里・岸本宏子・本多清志・竹本浩典・齋藤毅・細川久美子・八尋久仁代（2012）歌うことを科学する—学際的研究が声楽教育にもたらす可能性—、昭和音楽大学研究紀要、pp.4-13
- 平本弘子・桑田昭子・池田尚子（2005）自己実現のための歌唱 I—歌唱が人の心にもたらす効果を探る—、福山市立短期大学研究教育公開センター年報 2：pp.35-42
- 平本弘子・桑田昭子・池田尚子（2006）自己実現のための歌唱 II—初心者への歌唱にもたらす発声法習得の効果について—、福山市立短期大学研究教育公開センター年報 3：pp.43-50
- 安永明智・谷口幸一・徳永幹雄（2002）高齢者の主観的幸福感に及ぼす運動習慣の影響、体育学研究、47：pp.173-183
- 山田耕筰（1999）『自伝 若き日の狂詩曲』、日本図書センター